

力な集落により地域内の集落の統合が進む。こうした統合を進めた集落の中の特定の血縁関係にある一族は、その地域社会全体の支配者である首長層となる。首長層は当初共同墓地内に一緒に葬られていたが、しだいに共同墓地外に独自の墓地を営むようになる。更にこの状況が進展して、後期後半には地域によっては特定個人墓も作られる。北部九州では中期前半からこの動きが始まり、後半になると甕棺墓に前漢鏡や玉類をはじめとする多数の副葬品を持つものが現れる。更に、後期後半には溝で区画した方形周溝墓が造られる。瀬戸内の吉備地方では、中期後半から台状墓や墳丘墓と呼ばれる盛り土を持つ特定集団墓が現れる。日本海沿岸の出雲地方では後期に、四隅突出型の墳丘墓が造られ、近畿中央部でも中期から、方形周溝墓が営まれる。このように、首長層の墓地も各地方でそれぞれ個性的な形態になる（第11図参照）。

生産地（水田）の拡大 弥生時代の水田は、地形の特徴や水稲耕作の技術水準によって、湿田・半湿田・半乾田などに分けられ、水田の開発は、北部九州では縄文時代晩期末に自然堤防・谷底平野や洪積台地の縁辺部で進み、弥生時代前期には扇状地末端部や三角州の一部も開発される。中期になると耕作具に鉄器が普及し始め、水田の拡大に拍車がかかる。岡山県津島遺跡では湿田・半湿田に加えて、半乾田が自然堤防上に開発される。ただし、全国的に洪積台地や三角州が大規模に開発されるのは古墳時代以降である。

四 クニの発生と展開

縄文時代には大きな集団が長期間にわたって定住した集落が、既に各地に営まれていたが、狩猟・採集を

經濟活動の中心としていたため、集落間や集落内での個々人のつながりは比較的緩やかであった。しかし、水稲耕作が始まると稲を栽培するために必要な水の管理などは、多数の人間による共同作業が必要となった。このため、弥生時代の社会は地域的なつながりが強い社会となった。

村からクニへ

前期前半の集落は、一般的には四、五軒程度の住居に二〇〜三〇人ほどが生活し、経営する水田も小規模であったと考えられる。このような小集落が平野内に少数点在し、独自に生産活動をしていた。ただし、この時期に既に環濠を周囲にめぐらす集落があり、蓄積されつつあった余剰生産物をめぐって争いが始まっていたことが想像される。

前期末から中期になると、水田の拡大を通して平野内に大規模な集落が形成されるようになる。また、安定した食料の確保による人口増加とあいまって、分村が大規模集落の周辺に営まれる。こうした集落のなかで強力なものは周辺の集落を統合して各地に「クニ」と呼ばれる政治的なまとまりが成立していった。そして、クニを支配する首長は集落を構成するほかの一般の人々から、しだいに懸け離れた存在となりつつあった。中国の『漢書地理志』では、紀元前一世紀の日本の状況を「夫れ楽浪海中に倭人有り、分れて百余国と為る。歳時を以て来り献見すと云ふ。」と記している。この時期のクニは平野を単位として、経済的に独立した集団であり、朝鮮半島の楽浪郡を通じて中国と交渉をもっていたことが分かる。

倭国大乱と卑弥呼

後期になると、『後漢書東夷伝』で「桓・靈の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主無し。」と伝えられるように、二世紀後半には各クニの間で争乱が激しくな

第3章 弥生時代

更に、卑弥呼が死亡した際に「径百余歩」の墳墓が作られたということとは、弥生時代後期後半には埋葬方法が特定集団墓から更に一歩抜け出て、特定個人墓に移行していったことを裏付けている。

倭国のクニグニ

『魏志倭人伝』

に名前が残る

倭国内のクニは、対馬国・一支国・末盧国・伊都国・奴国・不弥国・投馬国・邪馬台国などである。このうち、対馬国は対馬に、一支国は壹岐

『三国志』の『魏志倭人伝』には「其の国、本亦男子を以て王と為し、住まること七・八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為し、名づけて卑弥呼と曰ふ。鬼道を事とし、能く衆を惑わす。……卑弥呼死するを以て大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。」と記録されており、倭国の大乱を経て三世紀前半に共立されたのが邪馬台国の卑弥呼であった。このころ倭の国は三〇国あまりと記されており、紀元前一世紀の段階からクニの統合が進んでいたことが分かる。



第12図 北部九州のクニグニ

(高倉洋彰氏原図)

に、末盧国は唐津平野に、伊都国は糸島平野に、奴国は福岡平野に比定され、不弥国は嘉穂盆地とする説が有力である(第12図参照)。また、これらのなかで伊都国や奴国の「王」墓と考えられる大形の甕棺墓からは大型の中国製銅鏡が多量に出土しており、ほかのクニの「王」墓に比べ、より高い富の集中度がうかがえる。つまり、各クニのなかでもその国力に差異があったことが推測される。

このような北部九州の後期のクニグニも、古墳時代に入るとしだいに畿内勢力のなかに組み込まれていく。

第二節 豊津の弥生時代の遺跡

豊津町内では、弥生時代前期後半から後期末に至る集落や墓地などの遺跡が三〇程度確認されている。生産活動の中心となる水田は、はら川流域の沖積平野で、前期の段階に既に開発されていたと考えられる。集落はこの沖積平野の縁辺部の微高地や河岸段丘上に所在し、墓地は更にその外縁部の低丘陵上に営まれる傾向がある。

集落は、現在のところ拠点となるような大規模な遺跡は確認されておらず、数軒からなる分村的なものしか発見されていない。また、長期間継続するような集落も確認されていない。

墓地については、後期に属するものが明確になっている。徳永川ノ上遺跡では周溝で区画された内部に数基の埋葬施設を持つ墳丘墓が一〇基集中し、銅鏡や玉類のほか鉄製の武器や工具を副葬するものがあり、当